

# 2021 年度 全体会議 議事録

日時 2021 年 12 月 23 日（木）10:00～12:00

会場 エコパルなごやバーチャルスタジオ

出席者：総出席者 23名（別紙全体会出席者名簿参照）  
・ 実行委員 7名（学長、実行委員）  
・ 関係者 6名（チーム員、アドバイザーボード）  
・ 事務局 10名

市橋事務局長の司会で、定刻に開始。

## 1 開会

### 【涌井学長挨拶】

お寒い中、お忙しい中、早くからみなさまご参集いただきありがとうございます。このなごや環境大学ができて以来、できた頃と今では環境問題に対する切迫度が全く違う状況になっています。COP26 を例にとるまでもなく、社会的共通課題として一番重要なのはこの環境となっています。パンデミックは文明を変えます。ルネッサンスが起きたのもモンゴル軍がハンガリー・ポーランドに侵入して自己免疫を持ったペスト菌がばらまかれて欧州の当時の人口の 3 分の 1 が亡くなってしまった結果、教会支配に歪みが生じてルネッサンスが起きた。これで中世が幕を閉じて近世になり、近世が近代になったのも同じくパンデミック。様々な感染症を持っていたヨーロッパ人が食糧難のために南北両アメリカへ渡り大航海時代が始まるんですけども、その結果、先住民であるインディアンが 90% 消失した。大砲の玉や鉄砲の玉で両アメリカを支配したのではなく、パンデミックで制覇したと言われています。そのブーメラン現象がムンバイで起きている。貧農たちが今日の食事をするということで産業革命の萌芽の時期であったのをコレラが直撃して、労働者・エッセンシャルワーカーが姿を消してしまったという状態になって、労働者という階級の権利を認めてきちんと作ろう、同時に都市は公衆衛生を基本にしようということで下水道が整備され、都市公園が整備され、こうして近世が閉じて近代となりました。今また我々はプラネタリー・バウンダリーという状況の中で非常に追い詰められていながらも、そこに COVID19 がきたということです。新たな文明が訪れる可能性が非常にある。新たな文明というのはどのような文明かということ、やはり「バックキャストする」ということ。つまり我々が経済を成長させても地球は成長しないという原則に基づいてバックキャストするという一つの大きな方向に行かざるをえないのではないかと考えています。

そんな中で、私個人のことでいうと今年 76 歳になります。しかし、やたら人使いが荒くなってきて、いろいろな場所に行かざるをえなくなってきた。先週は背中合わせになっていた長野県と岐阜県の国立公園満喫プロジェクトの座長として向き合わせしなきゃいけないということで、本当に命がけで上高地から西穂高に渡って 6 時間半、雪と氷の戦いで、押し上げられたと言った方が正確なのですが、穂高からロープウェイで平湯温泉に松本の市長と高山の市長を待たせておいて、俺は命がけで来たんだから手を組めということで共通DMOを作るということになりました。そうしているうちに、だんだん年齢を忘れてきてこのような状況になってきていると。なごや環境大学も錦二丁目では

SDGs モデル都市としての実験が千頭先生等のご指導により進んでおりまして、本当にありがとうございます。また森林に対する吸収源という考え方の中であるいは生物多様性の考え方の中で、私が学長をしております岐阜県立森林文化アカデミーとコラボレーションが実現していますのでそれに対しても感謝を申し上げたいと思います。切迫していながら日常に感じないという「静かなる危機」というのは一番危ういですね。津波のことを考えてもらえばわかるとおりです。「静かなる危機」、サイレントクライシスに我々は直面しているということに改めて目をやって、これが顕在化するはおそらく 2030 年ぐらいです。

私は 2027 年に閣議了解をとりまして、横浜の上瀬谷というところで、大阪でかつて花と緑の博覧会（国際園芸博）であったものを、BIE の承認をとって開催することが決まりました。皮肉にも大坂万博が産業革命以来の今の「成長」を目指した時代の最後の博覧会で、「成熟」を目指す生命圏に基盤を置いた新たな地球人のあり方を問う最初の博覧会が横浜の上瀬谷で開催される国際園芸博となるということです。いろいろそういう面では、様々な気づきがない中で啓発をしなければならないという中ではみなさま方のご活躍は非常に大きいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

## 2 議題

### (1) 各実行チームの 2021 年度上半期の振り返りについて

【議題資料 1P~8P】

ここから涌井学長が議長役として議事進行を行う。

「議題資料」に基づき各チーム代表者から説明が行われる。

鵜飼委員（企画チーム）・・・（議題資料 P1-2）

議案集のとおり。

杉野委員（人の環・広報チーム）・・・（議題資料 P3-4）

議案集のとおり。

事務局（ユースクラブ）・・・（議題資料 P5）

議案集のとおり。

事務局（森イキ！プロジェクト）・・・（議題資料 P6）

議案集のとおり。

千頭アドバイザー（SDGs 未来創造クラブまちづくりプロジェクト）・・・（議題資料 P7）

議案集のとおり。

場の中でつながりが生まれ、つながりの広がりによって新しい気づき生まれた。SDGs というのは「気づきとつながり」を生み出すのだと実感した。

事務局（SDGs 未来創造クラブ人づくりプロジェクト）・・・（議題資料 P8）

議案集のとおり。

### <涌井学長コメント>

このコロナ禍で活動もやりにくかったと思うが、SNS や YouTube など現代的な仕組みを導入して

活動していただいた。敬意を表したい。

話題提供。からむしのドキュメンタリーは、なるほどこういうものを着ていたのかという実感が生まれる。生物資源に対する日本人の取り組みは非常に大したものだと思う。また、同じ森の関連で、WOOD JOB!という映画があったが、岐阜県下呂市小坂町出身の宮崎監督が撮影した高山市の「木樵（きこり）」という森とともに生きている兄弟を描いた映画がある。WOOD JOB!の話題とは異なっており、森の機能や暮らし向きをリアルに描いたドキュメンタリーです。ぜひご鑑賞いただければ。

#### <須網委員コメント>

自治体としても、森林譲与税という一定の額が入るのはありがたいこと。名古屋市は COP10 を開いたということで生物多様性にも大変力を入れている。木祖村をはじめ水源のところで協働して事業を行っている。ひとつは生物多様性の側面、一方で CO2 の吸収源として森林は重要ですので、来年度なごや環境大学の活動にも関係してくるが、名古屋市としても積極的に活用して市域に限らず周辺の地域、地域循環共生圏という概念を森林譲与税を活用して自然豊かな地域と名古屋市と連携して取り組んでまいりたい。よろしく願いいたします。

#### <涌井学長コメント>

今まで排出者の議論ばかり行ってきた。しかし COP26 でもそうであったし、現在世界的に議論されているのは、吸収源としての森林の役割。これは曖昧な概念で、J-クレジットという経済産業省と環境省と農水省が一緒に作った「吸収源の取引」という市場ができあがっているが、全くエビデンスがない。本当にどの程度吸収しているのかの数字がおさえられていない。私は大号令をかけて、岐阜の山でサンプリングを行っている。吸収源は具体的にどの程度吸収しているのかを3つの累計に合わせる。ひとつは人工林だが、財貨を得るようなところに吸収源の機能をのせるのは問題がある。人工林は吸収能力が落ちている。それを切った後に対処余力のある木を植えて吸収源を増やすということ。もうひとつは落葉樹の広葉樹林というのは実は角材にしか使わない。ところが落葉して土を作る段階での吸収源は非常に大きい。もうひとつは、風致林などの天然林と同じ構造を持っている森のサンプリングし、岐阜版のボランタリークレジットを作ろうとしている。それをしないと、我が国は愛知県の問題だけにとどまる。愛知県を巡った市場の圧力は強くなってきている。人の好い日本人がそれを買うことにより外貨として出ていく。日本の森にきちんとした科学的な裏付けがあることを明確にするには、10年ぐらいかかるだろうが大事な取り組み。岐阜県だけでなく周辺の大都市圏の排出を抑制していくバランスの中で、どのくらいの吸収でやっていくのですよということ。人の暮らしの中で縮めていく、縮めきれないところに生まれてくる二酸化炭素の排出というものをそういうものでまかなっていくという構造を作ろうとしています。

#### <松本アドバイザーコメント>

リクエストです。いつも時間がないので仕方がない部分もありますが、なかなか共育講座に関しての報告や形が見えてこない。サポートしていただいているのはもちろん知っているが、どんなことをやっているのか、もっとイキイキと動いている部分がこのみなさんでも共有できる方が良いように思います。受講者の数字はほとんどが共育講座が持っているもので、そこに光が当たるようにしていたら嬉しいなと思います。

### <事務局コメント>

松本アドバイザー、ご意見ありがとうございます。共育講座については年2回、集合してそれぞれの活動を報告していただいている。例えば、古い木はCO2を吸収せず新しい木はCO2をたくさん吸収するという話題も出ている。そのような状況をみなさんにもお伝えできるような方法を考えたい。お時間があればみなさんも発表の場に参加していただけると大変ありがたいです。

## (2) 2021年度 中間決算について

【議題資料 9P】

「議題資料」に基づき 2021年度中間決算について事務局から説明が行われた。

質問なし。

### <涌井学長コメント>

執行残については有効活用すること。300万円あればいろいろできると思うのでよろしくお願ひします。

## (3) 2022年度 活動方針(案)について

【議題資料 10P】

「議題資料」に基づき 2022年度活動方針(案)について事務局から説明が行われた。

質問なし。

## (4) 「なごや環境大学の今後の進め方」に関する検討会議報告について

【議題資料 11P~14P】

「議題資料」に基づき「なごや環境大学の今後の進め方」に関する検討会議「1 進め方の視点の整理」及び「2 第4期ビジョン中間見直し【事業展開】」(11P-12P)について事務局から説明が行われた。

### <意見>

#### <鶴飼委員>

一番この中でなごや環境大学に関わった経験年数が短い・浅いため乱暴な意見かもしれませんが発言させていただきたいと思います。おそらく私が参加したのは第4期ビジョンがすでに成立して始まった後です。5頁の別紙2-2でいくと、2017年位に声をかけていただいて、2018年からチーム員として参加したかと記憶しています。当時の混乱は何であったかという点、なごや環境大学は大きな思想で活動を行っているが、どのように何を目指して進んでいくのかという点が不案内だったと反省しているところです。このような一覧表が当時仮にあったとしたら、もう少し焦点を絞った活動ができたのではというように思います。経験の浅い、あるいは今後関わろうとしている人にもなごや環境大学への関わり方が見える化しているというのは非常に重要なことだと思います。もう一点、今回、私はチーム員から実行委員へと歩を進めてきているわけですが、その中で明らかになってくるのは私

ちは想いがあっても十分な時間を活動に投入することに限界があることも事実です。そのような中で各プロジェクトを提案し、推進していくという2つの点に分けてみますと、やはり推進していくという部分をもう少し強化していくということが課題であっただろうと思っています。その部分がより充実される中間地点の見直しであると、下半期の当初の目的が非常に効果的に実現されていくのではないかと考えています。私見としては、「体制」のところについて課題があった今までではないかと思っています。

### <杉野委員>

なごや環境大学に関わってチーム員と渡ってかれこれ10年以上と感じられますけれども、この第4期ビジョンの中でブランディングのためのイメージ戦略が2011年かもう少し前に話が出ていたかと思います。共育講座の方々等に意見を聞きながら、なごや環境大学がどう見えるかやどう思っているかという話を事務局の方で苦労してまとめてもらい、それに基づいてブランディングにあたってのペーパーを一つ作成しました。それ自体が良いものかどうかについて（の議論）はまだあるが、見え方が統一したものができたと思っています。それに関わったものですから、正直なところ時間をかけてプロデュースの立場の中で見たわけですが、そこでブランディングがいわゆる「ビジュアル的な見え方」と「行動としての見え方」をどうするかというのが次のステップになります。しかし、ここ3年経っても、少しずつ改善してきているもののまだまだ非常に足りない。見え方としてのマークの成果という、ある意味ではつまらない部分は整理したが、なごや環境大学としてどのように発信して、皆の意見をもらうときに発信性をどう持つかということもありましたけれども、ある意味では、なごや環境大学は「お兄さん・お姉さんの立場」ではないかと思っています、どう発信性を一緒に上げていけば良いか、背伸びすることと一緒にやると思うのですが、それがちょっと見えにくい。それが行動とともにビジュアルとして印刷物やホームページに発信されると良いということはずっと思っています。前向きな言い方をしますと、今回、ホームページのリニューアルで見え方が今までと相当変わります。これまで講座しか見えなかった部分を活動として見えるように何とかしようということをしています。いずれ見ていただきたい部分はあると思うが、今ひとつの文章をとっても苦労しています。ちょうど15年経ったので、その中で実際に、チームの中にいる人間としては13頁の実行委員のあり方の中で、(3)組織体制で「一体感をもって目標を達成して、機運を醸成する」とありますが、現実問題としてどうやって機運を高めていくのかという点を最終的に掘り下げる必要があると思っています。

### <松本アドバイザー>

今後の進め方の検討会のいちメンバーとしてお聞きしました。今までの説明に対してというのと、とりまとめをしていただいてありがとうとしか言いにくいなと思っていますが、先ほど鶴飼先生からもお話があったのですが、結局ここからどうしていくのかというのが一番大事だと思っています、その部分はまだ出てこないですね。この後にお話があるのかもしれませんが、具体的にどのような実行体制を、何をするために、2030年、2050年になごや環境大学がどうしていくのというものもあって、何をするためにどんなセクターのどんな役割を持った人たちがどんな運営体制でやっていくとそれが叶っていくのかというのを話し合う場というのは必要なのではないかなと思います。それはこの後（の説明にある）かもしれないが、そこが見えないと次のステップにはいかないなと思っていますので、その先をまた考えていきましょう、なのか、考えていってください、なのかわかりませんが、見

えるといいなと思っています。

### <千頭アドバイザー>

なごや環境大学って名古屋を何とかしたいよねという思いを持った方が集まって立ち上げたからこそ、何とかしたいという思いを持ち寄れる場であり続けるべきだと思います。先ほど推進体制について鶴飼先生が話されて、それは両方あると思いますが、やっぱり実行委員全員が名古屋を何とかするために動きつつという部分も大事にしたいし。「冷静な熱意も含めた熱意」を持ち続けて、何とかしたいんだという思いを良い意味でぶつけ合うような、そして自分でそれを担っていく側面が絶対いるということです。同時に、仕組みを将来にわたってどのように上手く転がしていったら良いかということや、少し違う角度からきちんと考える側面という両方の側面を上手くバランスさせないといけないと思います。その2つの側面を別々の人間が担うこともあるかもしれませんが、1人でも両方担えると僕は信じていて、抽象的にはなりますが、そういうことがなごや環境大学の強みになればいいかなと思っています。

### <岸田アドバイザー>

久しぶりに皆さんの顔を拝見して、一番最初に設立した頃のことを考えていたんですけども、今、中間支援団体がなくなっていっているの、私たちパートナーシップサポートセンターが一番最初に関わったときというのは、いろんな立場・ステークホルダーの人たちが関わる中で、パートナーシップとは一体何だろうか、協働していくためには何が必要なんだろうかというときに私たちの役割があるということで最初に関わらせていただいたということを考えていました。そうすると、今の協働やパートナーシップという観点から見たときに、なごや環境大学の意味はとても大きいのではないのでしょうか。最も大事なことは、協働でいろんなことをやっていく人材をどうやって育てていくことなのではないかと思っていて、私はパートナーシップリーダーという形でリーダーに関することをいろいろやってきたという背景もあって、何度かこの中でも経験させていただいたかなと思いますが、なかなか形になっていかないというのが半分じれったさもあり、私自身の力はあまり環境オンリーに向いていないところもあって、力が分散してしまうということはあるかもしれませんが、そういう意味では人づくりという、協働を進めていくためにはどういう人たちが必要なのかという観点をもう少し入れても良いのではないかなと。なごや環境大学の役割としては、そういったところが必要なかなと思いました。

「議題資料」に基づき「なごや環境大学の今後の進め方」に関する検討会議「3 実行委員会のあり方」及び「4 事務局体制」（13P-14P）について事務局から説明が行われた。

### <横山委員>

先ほどの第4期ビジョンも含めてお話させていただきたいと思います。私自身のことを振り返りますと、ミクロ的な話とマクロ的な話の順番で、まずミクロ的な話でいきますと、涌井先生が学長に就任されて、私も実行委員にならせていただきました。活動の内容を見て振り返ると、2017年は学生・ゼミをワッカモノビレッジに入れたり大学連携協定として名古屋外国語大学との連携。エコプロ展では涌井先生と私と徳川家康さんで登壇してなごや環境大学のPRをしました。2018年には、なごや環境大学のPR動画を作成させていただいたり、2019年には中日ドラゴンズのエコバックの作成、

これは3日間で1000個を売ってすごい反響があって学生たちも非常に感動したプロジェクトで、ほとんどの学生が就職活動のときにこのプロジェクトのことをエントリーシートに書いていました。また、ここには書いていないのですが、実は藤前干潟とも縁ができたので、CBCさんの30分番組を企画・演出・出演までしたということも実はこのなごや環境大学の縁があって初めてできました。2020年はコロナが始まってからちょうど東海学園大学、松原元市長が学長を務めているところとのご縁がありまして、客員教授になったわけですが、コロナがあったということで、生物多様性と共生（ともいき）、春秋2020年・2021年に、オンラインのときもありましたけれども、なごや環境大学の金井さん、環境局の尾上さんに来ていただいて、どちらかというところを共育を中心に、なかなかフィールドができないということで、そういうかたちでなごや環境大学とお付き合いさせていただきました。このミクロの視点からわかることは何かというと、実行委員の立場はそれぞれ大学の教員の立場の方もいれば、実際にフィールド・自然のご活動でビジネスをやられている方、いろんなデザインの方もいらっしゃいます。その方たちが自分たちの立場の中でなごや環境大学をどれだけどういう形で、言葉は悪いですが、活用させていただくか。それがなごや環境大学の総体としてパワーをもってくるのではないかというふうに思っています。20年・21年はなかなかやりにくかった部分もあるのですが、少なくとも17年から19年を振り返ってみると、徹底的になごや環境大学の持っている人的ネットワークあるいは予算、活動、そういったものを徹底的に活用させていただいたのが私だったのではないかと思います。従って実行委員会をどれだけ活用するかということがなごや環境大学の活性化に繋がってくるのだと思います。それがミクロの視点からです。

マクロな視点から見ますと、先日、会議で第4期ビジョンを見せていただいて、これは実行委員会形式なのだというところに改めて実は気づいたんですね。名古屋市の環境行政を実は担っている組織でもあるわけですね。ところがもし名古屋市環境局さんがこれをやっていたら、ここまでのセミナーとか協働・コラボレーションはできなかったと思います。もしこの組織がなくなった場合、どのようにプラットフォームとして継続していくかというのは非常に難しいです。つまりこのなごや環境大学というのは持続的に必要だったと言えるのではないかと思います。もう一つ課題としては、涌井先生は東京の方でも全国で活躍していらっしゃるということで学長になっていただいて大変ありがたいなと思っていますし、尊敬している方でいらっしゃいますので、一生懸命にサポートしたいと思っております。一つの課題は、私はもともと広報の専門家なのですが、もう少し名古屋市の市長が環境行政に力を入れていくというのが非常に重要だと思います。トップが積極的にコミットしていけば、なごや環境大学が必ずお役に立てる組織だと思います。当時は環境行政にもっと、2005年は私は東京におりましたが、全国から名古屋に視察に来ると。なごや環境大学ってどのようなものなのだろう、と結構注目されていました。あるいはごみ問題をどのようにやっているのだろう、どのようにリサイクルをするのだとうと非常に注目されていました。従って、トップが環境行政にさらに注力していけば、このなごや環境大学というはお役に立てる組織ですし、先ほどミクロのお話をしましたが、活性化に繋がっていくと思います。大学の機能は、教育と社会貢献だと思います。なごや環境大学では共育講座をはじめ多くの教育面がありますし、社会貢献も多くやっているといます。ひとつ先ほどの組織論から言いますと、コンサル的な人がここに足りないと思っているので、コンサル的なことができる人、つまり研究機能を持っている人、コンサルするためにはある程度研究していないとコンサルできないわけですので、それがなごや環境大学に加わると、私が当時イメージしていました、「環境のことはなごや環境大学に聞こう」ということが可能になってくるので、第4期ビジョン、今後の活

動の中でそういった方を公募しながらコンサル機能を充実させていくということは組織を活性化させることに繋がっていくと思っています。

### <山口委員>

実行委員に去年からなりまして、去年は一年間、私自身がなごや環境大学のことを模索しながらいろいろ知ってきた、勉強させていただいたと思っています。今年度、からむしの映画や森イキ！プロジェクトの方で森林文化アカデミーさんの方で一緒に企画をさせていただきました。私も、先ほど横山先生が言われたように、このビジョンを改めて見まして、私が専門にしています建築や伝統産業というもの、持っているものを活かしながら実行委員をしていきたいなということと、もちろん先ほど言われました、このなごや環境大学は「気づきとつながり」をしていくということを市民の方たちにわかっていただけたらと思っています。みなさまが言われているように本当にこの2年でコロナで変わりましたので、このビジョンや組織を見直すのは大切だと感じています。実行委員として行っていきたいと思っています。

### <九里委員>

私は神奈川県から来ております。理由は、中京大学で2003年から環境科学という授業を教えておりまして、週1日は名古屋で過ごすという、ちょうど楠美先生がご退任ということで推薦いただきまして実行委員になりました。2年間ということで全部コロナです。チームのメンバーとも直接数回はお会いしましたが、どのように進めていけばいいのかがわからなかったというのが正直なところですが、最近熟議と経験を経てやっとわかってきました。まずは立場だと思います。大学・専門の研究者の立場というところが一番重要でして、その立場を確認しつつ、参加する方々、自分も含めてステークホルダーがどのようなメリットがあり、社会がどのようなメリットを得られるのかというのを基本的に考えていきますと、先ほどから出ています「気づきとつながり」という点を私なりに解釈すると、大学ですから、学びながらつながっていくと。大学の授業は講義型ですと、繋がっていません。最近だとアクティブラーニングやワークショップでつながりだしていますが、それも外と繋がっているかという繋がっていません。コロナ以前は、私は中京大学の授業でも学生を名古屋や愛知県内のNPOにいくつも紹介して、もしくはこちらのなごや環境大学も紹介して受講させるといったような授業外での学び、そこでの気づきもありますしつながりというものがない学生ではない人たちとNPOの人や社会人の人たちと繋がっていくそういうチャンスにできたらと思って委員に就任したらコロナになってしまいました、そう簡単にはオンラインでもやりにくいというような状況でしたが、今後収束してくれば、いろんなことができるんじゃないかなと。学長の方からもありましたけれども、オンライン、SNSも最大限活用しつつ対面でもいろんな活動ができていくのではないかなと思います。この実行委員会のあり方の話を交えてさせていただきましたが、2年間という短い時間の中でしたが、私は富山市の政策参与をしていまして、環境未来コンパクトシティ、環境未来都市、環境SDGs未来都市の政策策定、特に自然環境と専門が企業の環境経営と企業の中の環境教育ですので、その視点から政策立案と政府への提出ということをやらせていただきました。その中でSDGsは大きな視点ですねということで企画委員会の中では力強く言わせていただいて、20年からSDGsのイベントごと、ESGですから、Sの側面もかなり大きいので議論もありましたが、それを中心的においてということで、もちろんEの環境の部分も当然重みを付けて、しかしSDGsという形で進められるということまでできているということです。実行委員のあり方ですが、先ほど事務局からありましたように、理念と協

働を再確認するという事で私は特に参加してまだ浅い委員にとってはこちらの確認というのは非常に力強いといえますか、本当にきちっと確認して、そして実行できる形にしていければいいなと思っています。

#### <曾我チーム員>

いちチーム員ですので、実行委員としての意見というのは申し上げられなく浅い経験でしか言えないのですが、数年このなごや環境大学にチーム員として関わっていて、常に思っていたのは、どんな組織かわからなかったというのが正直なところでした。前回のチーム会議で第4期ビジョンに基づいた資料を見せていただいてようやく全体像が掴めました。いつも思うのは、なごや環境大学という組織ないし社会教育機関が住民に対してどのような認識を持っているのかというところが正直まだわからないなというというのが率直な感想でした。SDGsをはじめとしてESDも環境教育はそうだと思うのですが、常に人々の意見としては二極化していて、意識高い人と呼ばれる人たちだけがアクセスできる組織になってはいないだろうかというのがずっとあります。企画を立てる際にもそちらに寄ってしまっていては名古屋市が関わっているというメリットが生かせないのではないかと考えています。ここ1~2年ですが、住民目線ないし私自身も大学教員として学生たちと関わっている視点から、学生にとってどうやったら魅力的な場になるだろうというのを常々考えてきて、学生たちが関わりやすい柔軟性があるのかという必ずしもそうではない。非常に、単年度予算での動きだったり、SDGsとうたいながら環境要素が強いというところの縛りが非常に学生たちにとっては動きづらいというところがあると思います。あとは住民目線というところで、意識が低いとはいきませんがSDGsに対してそこまでの関心がない人に一歩を提供できるのかというのを企画チームとしても鶴飼先生方をはじめとして意見を申し上げているのですが、そういう感覚がないとずっと二極化は変わらないかなと思います。どこをターゲットにするかというのを改めて確認するとともに、行政としての限界もあると思いますが、環境系の環境局だけが関わっているというところにおいて、どこまでの学際性・領域横断性というところを共有講座や企画するイベントに関しても見せていけるかなということが課題かなと思います。

#### <楠美アドバイザー>

3点、組織体制、SDGs、コロナの話など。まず組織体制について、アドバイザーという肩書が付いて、先日、個人的に大学で兼業申請をする必要があると今更気づき「あれ、これって委員なのか何なのかな？」と事務局に聞いて事務局の方も首をかしげるというような状況がありました。だからアドバイザーボードとは何だろうなと思っていました。今日の会議の案内資料をいただいて、いつもいただく実行体制案の名前の入った大きいやつを添付ファイルをいただいて、やっぱり見る度に大きくなるんですね、見る度に複雑になる。今回は批判でも応援でもないですけど、千頭先生がさきほど発表される、アドバイザーボードの方なのに。これは普通に考えたらアドバイザーボードの仕事では絶対ないので、おかしいなと私は正直思います。でも今日のこの実行委員会のあり方の話をいろいろ聞いて、10年ルールの評価という形になってはいますが、アドバイザーボードの位置づけという形に書いていますが、いろいろ千頭先生のお力が必要で頼まれたような経緯とかがあったのかな、とよくわかりませんが、わからないなりに想像しています。とにかく僕はこの委員会の立ち上げの時から関わってますけど、それでもわかりにくい。なので、例えば千頭先生とかの力が必要でなのであれば、フェローとかシニアフェローとかの名前が出てますが、それはアドバイザーボードよ

りは絶対に良いと思うんですけど。じゃ一回、10年ルールとはいったい何だったんだと、これは評価と見直しということなんだと思うんですけどね。そこをもう多分同じ問題意識を共有してらっしゃると思うので、それで良いと思うんですけど、そこをしっかりとやっていただいて。今この瞬間の体制はちょっと奇妙に見えるので、すっきりしていただいて、なおかつわかりやすいのにしていただいて、新しく入って来られる方も理解するのに時間かかるということをさっきからみなさんおっしゃられている。私はずっと立ち上げの時から関わってますけど、しょっちゅう変わるし、このさっきの画は見る度に大きくなっていくし複雑になっていくので、とにかくできる限りシンプルにさせていただきたいなというのがこれは一つお願いです。

それからSDGsについて、曾我先生のお話、これちょっとどちらが認識ずれているのか、私がずれていると大変申し訳ないんだけど、僕はここは環境のことをやる場だとは思ってるんですけども、でもSDGs自体が環境のことだけではなくて、もう言っちゃっていいんですかね、持続可能なということで幅広くなってしまっている。これは名古屋が決めたことでもなく、日本が決めたことでもなく、世界が決めたことなので、それを推し進めようということは良いことでしょうし、段々と認知度も上がってるのでせっかくなのでこれを推し進めるのは良いことだと思うんですが。先程の曾我先生の話でいうと、いまいち関心のないような人でも入っていけるようなものになっているというのは良いのですが、一方で「持続可能」という言葉はもう30年20年以上使われてますけど、最近もうどこにでも枕詞で使われるわけです。今日もここ持続可能な制度を見直すというように。持続可能という日本語としてはまったく間違っていないのですが、世間がこういうふうにして使ってるので環境の文脈での持続可能性がなぜ必要なのかをわかってる人は今ものすごい割合として減ってます、むしろ。この根本的なことを教える場はほとんどない。私は授業で教えてますけれど、例えば成長の限界という言葉は昔は高校の教科書にも載っていましたが、最近は載っていない。別に成長の限界なんてもう来ないよと誰かが言ったわけでもないのに、そんな基本的なことを今の大学生以下はもちろんひょっとしたら20代の社会人30代の社会人も知らない人が増えてるので、せっかくSDGsというのを広めるのであれば、そういう根本的なことを教える場もできたら作っていただきたいなということです。

最後3つ目、コロナの話ですけど、コロナは大変でみんな苦しんでるわけですが、コロナに関しては環境問題ではないので、さっき言ったことと矛盾します、すみません。でもなごや環境大学というのは、いろいろまちづくりとかダイレクトに環境に関係することは広くやっついこうという方針のようなので、そういう文脈でいうと、コロナもそろそろ2年経ちますけれど、マスク使用・ソーシャルディスタンス・三密とかそういう話だけじゃなくて、不確実な問題に市民一人ひとりがどのように関わっていったらいいかというリスクの捉え方とリスク込の問題のはずなんですね。それをシステムティックに教える場がまったくない。私は個人的に自分の授業ではやってますけども、TVとか情報系番組とかを観て最初みんな右往左往していた。落ち着いてきたら、落ち着いたからなんとなくもうやり過ぎそうというだけで、システムティックな理解に努めている人っていうのは一部の人に限定されている。でもそれを教えられる分野というのは何なのかというと、かなり学際的な分野だと、リスクの分野はなのだと思いますが、でも地球温暖化から何から環境問題はすべて不確実な問題が多いので、環境分野の人間のやっていることと限りなく近いと私は思ってます。だからこのこともただ三密避ける・マスク付けるじゃなくて、踏み込んでなごや環境大学としてこのコロナ対応ということ、市民がそういう力を付けられる場にさせていただけたらすごくいいなと思ってます。できることは致します

ので、よろしく申し上げます。

### <長谷川アドバイザー>

私からは本日3点です。まずは取りまとめしていただいたものを改めて見まして、なごや環境大学は時代のやっぱり先取りをしていたんだなと。というのはSDGsについても、これを見ると2018年で映画をやっているということは、2017年にはもうわかっている第4期ビジョンも出ていたということは、2015年に国連が採択している、2016年スタートですよ。同時に併せてやれたってどういうことか、SDGsの前にESD拠点になっていた、もっと前を言えばCOP10をやっていた、それをもうちょっと前を言えば藤前干潟のことがあったということでこの流れの中にこの組織体があるなと。そこで名古屋市が考えたのは、ごみ問題は行政だけじゃできないから市民のみなさんでやりましょうと。その市民のみなさんでやるというのがどういうことかと言うと、何かやれませんかと声をかけたのが実行委員だったと思うんです。実行委員は自分のやるべき使命を持ってここに来ました。一緒に何かをしていくという仲間がスタートだったと思います。ただ今こちらにいらっしゃる方々もここを使って何かを変えていくんだっていう方々だと認識しております。その中でですね、1つは環境大学として市民のみなさん自身が学んでいくということが重要なので、講座というのをしましょうということで立ち上げました。これはかなりの方々が講座を立ち上げていただいて、私たちは身近な人たちにどんどんいろいろ教えていただいているという部分では広がりを見出しているのではないかなと思いますし、それから森づくりとかということに関してもだいぶ力を入れてきたので、ひとつの形になってきたんじゃないかなと思っています。これは環境部としての一つの成果でもあり市民の成果でもあると思っています。ただ、一つ課題で、森はできてるのですが、名古屋市というこの大都市圏は森や生き物のことを住処をどけて人間だらけになって、緑地と緑地を繋いでいくという部分は行政上でいうと緑政土木という別の管轄が持っているわけですよ。街路樹という部分は、木は植わっていてもその間はコンクリートやアスファルトですし全然繋がってない。片や緑政土木のほうも街路樹を植えたいけれど、結局落ち葉問題があるので伐ってしまうと。ここを担わないと、緑のネットワークなんて無理ですし、無理無理って言ってたら未来はないので、今日の涌井学長のお話ですけど、新しい仕組みを作り出さないことにはいけないなと。だから落ち葉はお金になる仕組みだったりとかをボランティアではなくて、何らかの形、そこにインセンティブがあればです、お金じゃなくても、というものを作り出せば、ここからしか無理だなと私自身は思っているんで、そういう新しい仕組み作りというのをやっていきたい。それは結局先を見越してやれてること、最初はみんなおかしいって言われるんです、SDGsだって何それって言われましたし生物多様性も何って言われたのが、5年経つとみなさんがよく知ってる、やってもらえる。きっとこの落ち葉の話や街路樹、それから木と木の間を空けて土に少しでも繋げればですね、もう今は町からは、あめんぼもみみずもカタツムリすらももういないこんな状況で持続できる町が維持できるわけがない、というところをみなさんで多くの関わっていただいた方とやっていけたら新しい仕組みとしてやれるのかな、そういうことをやっていける実行委員がどんどん増えていただければ心強いなと思います。これが1点です。

それから2点目、ちょっとみなさんには言いにくいなと私が代わりに言いますが運用の話です。やはりこういうことをやっていくと当然みなさん無償から最初のうちはこの団体ってお金が全然無かったんで、思いでみんな来てましたから、実行委員も。かなり無償ボランティアでやってた時期がありました。お金がないからしょうがないねという割り切りがあった。でも最近は少しずつ潤沢のお金が

出てきたときに、さすがにここまでボランティアさせますかと。やらしい話、お金を名古屋市に返さないんだったら良いんですよ。余ったお金を返されるのだったらちょっと私たちがやった分とか交通費とか多分行政の中のものは出されてると思うんですけど、見えない部分であったりをちゃんとフォローしていただける仕組みを作っていただけると、愚痴が減るかなとか納得できるかな、立ち上げのメンバーは良いですよ、思いがあって来てるから。じゃこれを次の人に紹介するときに、残念ながらすごいやりにくいです。そうでなくてみんながハッピーでやれるよねという仕組みになればですね、お金が無い時は無いでいいんですよ、ただあるときにはちゃんとみなさんで納得いくような形の割り振りがあるといいな、これはたぶん公金を使うのと民間で使ってるお金の使い方との違いがあると思うのですが、もう少し明確になるとやりやすくなるなと思います。

もう一つですけど、さっきの森づくりに関わられてる講座のメンバーですけれど、よくいう高齢化しているというのは事実なのですが、ここもボランティアに頼るのは限界ですので、ここも新しい仕組みが必要です。これもずっとずっと前から言っていて、もうOBに頼るのは、私たち自身も愛着がないですから、子供のころ遊んでないので、こんな豊かになってじゃあ森に行くかという、当初は環境教育をしたから将来の子は森に関わるって言って洒落ている世代がありましたが、嫌いではないかもしれないけれどそれを職にしたくてもできないから結局違うことをしてるので、勉強をしていない人がいるわけじゃなくて、そこでの仕事をまず回していくというような部分で、町の中でのそういう何かの仕組み、もしくは会社に対してやってもらったりインセンティブを与えられるような仕組み作りも加えていただければいいなと思います。これで最後です。

全部これを見さしていただいて今日お話ししてきました。なごや環境大学はあくまでも手段ですよ。持続していこうとされている、これからもみなさんに環境ということを知ってもらう、それから最新知識ですよ、最初のうちは環境ってなんか自然だとか森だとか言っていましたが、環境は私たちが生きていく全てです。自分の身体以外全部環境なので、だからどんどん広がっていくと思っています。これを伝えていくための手段というのがここであって、目的ではないので、やり始めるとこれが目的になってしまうんです、いろんな箇所が。なので必ずこれが手段なんだよねということを思っただけでもっと前向きにいろんなことがやれるかなと思います。固有職員の方々はできる限り長く定着していただけるような雰囲気づくりとか、講座の方々が来ていただいても行政って座ってらっしゃる方は3年おきで代われちゃうと、来たときに知ってる顔があるのとないのとは私でも不安感が全然違います。知っている顔があるとすごくほっとします。なので行政の方々はここを通してまた戻ってもっと広がったことをやっていただくという使命で来ていただければ良いのですが、固有の職員の方々はずっと来て顔が同じ人がいるよねってこの安心感に私は今すごく支えられていますので、そんな良い雰囲気を作っていただけたらと思います。後ろから応援はしていきますので、これからもよろしく願いいたします。

#### <須網委員>

このなごや環境大学につきましては、ちょうど立ち上げのときに主査で関わらせていただきまして、基本構想を渡されて、またこれをやるのかと。どうしようかと思いました。ここに書かれていることは本当に壮大な取り組みかなと思ひまして、そのときにご迷惑をおかけしたと思ひますけれども、私が一番、みなさんのところに何度も足繁く通って、いろいろお聞きしながら助けていただいて、僕は

岸田先生にも怒られたりしましたが教えていただいて、市民団体の立場とかを教えていただきながら。正直（なごや環境大学が）10年もったときに、よく10年もったなと思いました。今16年で、立ち上げのときの今アドバイザーボードにいらっしゃる先生方と、実行委員をされているみなさまのおかげだと思っています。この場を借りて改めて行政側としてお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

先ほど涌井先生のお話でありましたが、なごや環境大学はいわゆる人づくりだと。ということで当初ちょうど万博があって、市民団体の活動も盛んだったのですけれども、最近ちょっと見ますと、岸田先生が言われた中間支援団体やそういう役割・団体がいなくなっているということや環境も点では行われているけれどもなかなか線・面としての取り組みがないという現状を考えますとなごや環境大学はそういう役割を担っていくという立場もあるのだなと思います。最近コロナとか温暖化とかいろいろ言われています。それから涌井先生の話にありましたように人々の行動の社会変容を求めていくと。みなさんどうすれば良いかわからないというときに、なごや環境大学がひとつ社会実験的な事業をやっていくことによって、先ほどありましたように「発信」していくということもあるのかなと。それはなかなか環境局という行政だけではできないことをみなさんが集まって実行委員会形式だからできるところもあるんですが、今後の事業展開につきましては、ベーシックとなる講座はしっかりやっていかないといけないと思いますが、あわせて、これから環境問題に取り組もうとしている団体とか、そういったところを支援あるいは繋げていくような人の環を繋げていくようなコンサル的・アドバイザー的な、昔で言えば中間支援団体的な力としてはなごや環境大学としては求めているひとつ大きな柱かなと思っています。

もうひとつは、今回錦二丁目でもやりましたが、実際の町や場を舞台とした社会実験的な取り組みによって他の団体への波及効果もありますし、そういった取り組みが名古屋市を動かすといったこともありますので、社会実験的な、個別の講座ではなくてなごや環境大学として社会実験をやるというそういった取り組みもひとつの柱として考えたいなと思っています。

それをやるにあたって体制のことですが、先ほど実行委員会のあり方等も委員のみなさまからご意見をいただきましたが、もともと実行委員会とは何ぞやということを考えますと、実行委員会って何か目標があってそれに向かったやるための人が作った組織だと思うんですね。ですので先ほど10年ルールの話もありましたけれども、あれは個人的には間違っていたなと思います。年数ではなくやはりなごや環境大学の趣旨を考えるのであれば、何か事業をやるにあたって手を挙げて、これを一緒にやっていこうねというなごや環境大学の趣旨に賛同していただける方にはその土俵になおっていただいて、共にやっていくと。それがやっぱりなごや環境大学の根本的なあり方ではないかなと思っています。そういった意味では「強化」と書いてありますが、もう一度見直していきたいと思っています。これについては、いろんなお考えがあったり、気分を害された方もいらっしゃると思いますけれども、それにつきましても改めてお詫び申し上げます。

実行委員会につきましては、先ほど楠美先生がおっしゃいましたように、シンプルというのは本当に大切なことで、単純にこういう事業をやっていく、だからこういったように集ってほしい、そしてそこで何かをやっていこうというシンプルな形にしていきたいと思っています。ただ、やはり組織で

すので、新陳代謝も必要ですので、工夫が必要かなと思っております。ちなみに先ほど楠美先生がおっしゃった千頭先生のお立場としては、私どもアドバイザーボードやチーム員や実行委員に関わらず錦二町目のプロジェクトをやろうというときにどの方がまちづくりに参加してみたいかなという中で千頭先生にご相談申し上げたということで、リーダーになっていただいたということですのでそういった意味では先取して、実行委員だから、チーム員だからということではなくて、プロジェクトを進めるにあたって一番、私たち事務方としてはお願いしたということですのでご理解いただけたらと思います。そういった意味では実行委員のあり方と書いていますけれども、再度、事務局の方から個々の委員のみなさまに趣旨をご説明して再度やっていただければどうかというご確認を差し上げられたらと思っていますので、そのときにまた意見交換させていただけたらと思いますし、そういうプロセスを経て新しい体制を作っていきたいと考えております。

それから事務局体制につきましても、長谷川先生からもお話ありましたが、やっぱり実行委員の先生方は大学の先生だったり企業の方であったりしてそれぞれ仕事があって、かつボランティア的だとありがたいんですけどもなごや環境大学の趣旨に賛同してちょっと力を貸してやろうという方に集っていただいていると私は思っておりますので、やはりそこを、実行委員の方をどう支えるかというのが事務局の力量だと思っています。ですから事務局としては今後、体制を強化しまして、やはり委員の方々と意見交換をし、そしてそれを形にしていく、そこを支える体制にしていけないと思っています。以上ちょっと早口になりましたが、実行委員と事務局体制については、それを見直すのであって、なごや環境大学は先ほど申し上げましたような、主に3つの柱ですね、講座、中間支援・人づくりの輪を広げる、社会実験的な事業を行う、そういった事業を念頭にどういった形で進めていくのかということにはどういった組織が必要なのかということについて改めて実行委員のみなさまについてはご意思をご確認したいと思っておりますし、私どもとしては事務局体制もしっかりと強化してみなさんを支える体制にしたいと思っております。なごや環境大学というのは、よく学長からもお話いただくのですが、全国的に見ても稀有な組織です。まったくの私の組織でもまったく行政でもない、ある意味いろんな志を持った方が支えながら取り組むといったフレキシブルなところをもった組織ですので、長谷川先生がおっしゃったように続けることが目的ではありませんが、改めて今の状況を考えますと、なごや環境大学に求められていることはもっとあるのではないかと、思いますと、今一度、みなさまのお力をお借りしてより次のステップへ進めていくことができると思っておりますので、何卒よろしくお願ひいたします。これまでどうもありがとうございました。これからもよろしくお願ひいたします。

#### <涌井学長>

今日のお話を伺って、それぞれみなさんからのお話はなるほどなというように感じ入りました。しかし、先ほど楠美先生からもあったように、COVID19の問題は我々が扱って当然の問題だと思うんですよ。それはなぜかという今、医療の世界ではその原因が何かといったら我々が野生生物に対して手を出した結果であるというということは明白であって、そこから出てきた概念が「ワンヘルス」という概念ですね。みなさんご存じの通りで私があえて言うまでもないと思いますが、地球が健康、生態系が健康であったならば、地域や都市も健康であり、地域や都市が健康であれば、個人も健康であるというワンヘルスの状況をどのように作り出すのかということが、非常に重要でこれは環境とイコールだと。医学的な立場から言えばワンヘルスですが、まさにそういう見方だと思います。もうひ

とつ、事務局にも間違っほしくないことがあって、「社会的に変化が起きています」と書いていますが、そうではない。トランスフォーマティブチェンジというのは、社会的大変容が「起きている」のではなく、「起こさなかったら持続的な未来はない」という意味です。ここのスタンスが全然違います。状況として変化が起きていますね、ということではなく、起こさなければ地球はもたないんだという考え方の違いは非常に大きいですね。ここはしっかり整理してほしいと思います。それから、経済活動も今何が起きているかという、要するに「無価値の価値化」という現象が起きています。今まではまったく無価値だったものだけどそれにお金を払っても価値化したいという現象が様々な形で起きていますね。例えば森の問題を考えても同じようなことがたくさん起きていると思いますので、こういうようなことで、今日の見直しというのは中間報告ですから、ぜひ先生方の意見をしっかりと投影していただいて。もうひとつはあえて苦言を呈しますけれども、行政はこれから何をやっていかなくてはいけないかという、ルーティンの作業ではないんですよ。そこを勘違いしないで、いってみれば宴会の幹事役なんですよ。出席者は誰かと言ったら、市民であり、企業であり、様々なステークホルダー、その上手な幹事役をやるかやれないかというのはひとえにホスピタリティの気持ちがあるかないかということにかかってきます。昨日あることで苦言を呈したんですけども、そこにはホスピタリティのスピリットがないということを私は言いたかったのです。そういう意味で言えば、長谷川様が大先輩としてみなさんが言いにくいことを言っていただいたと思いますが、ボランティアということに甘えないで、どうやってみなさんがこうして汗をかいたり時間を割いて集まっていることに対してしっかり報いていくのが、お金という報い方もあるだろうし、別の報い方もあるかもしれない。そういう報い方についてもしっかり目を向けてほしい。何よりも、最後に、一番大切なことは実行体制ですよ。仮に我々が有償であろうが無償であろうがボランティアであったとしても、それをどうやってしっかり現実化していくかという体制が弱かったら砂上の楼閣になることは間違いありません。これを名古屋市においてはしっかりと見ていただきたい。これを最後にお願いして、私の意見とします。どうもありがとうございました。事務局にお返しします。

#### (4) その他

質問なし。

議案のすべてが了承されたことを確認し、終了。

### 3 閉会

本日の予定がすべて終了したことを伝え閉会。

以上